様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５９０２２２

研究課題名（和文）英国独立学校のパストラル・ケアに関する質的研究―包括的ケアの分析を通して―

研究課題名（英文）A qualitative study of pastoral care in independent schools in England with an analysis of comprehensive care

研究代表者
古阪　肇（Furusaka, Hajime）

千葉大学・大学院医学研究院・特任助教

研究者番号：２０７１０５３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英国独立学校の中のいわゆるパブリック・スクールに主眼を置き、当該校における「パストラル・ケア」の実態を解明することを目的にしたものである。パストラル・ケアとは、パスター（牧師/羊飼い）が信者/羊を親身にケアするように、学校生活において生徒をケアすることをあらわす用語である。
イギリスの法令に明示された定義はなく、英国独立学校を対象とした先行研究は稀少である。しかし、調査対象としたパブリック・スクールにおいてはいずれも非常に重視すべき概念として捉えられ、個々の学校単位でパストラル・ケアの方針やガイドラインが厳格に定められ、教職員の連携を密にして取り組まれていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to clarify how pastoral care functions in independent schools in the UK, especially in English Public Schools. ‘Pastoral care’ in the concept of this research is used as a term meaning ‘to provide a care for pupils at schools as cordially and warmly as pastors care for their congregation/flock'.
No definition of pastoral care is specified in UK legislation, and there are few previous studies on pastoral care focusing on English public schools. Throughout the research, it is made clear that all the schools that I researched treated pastoral care as a significantly important concept. In addition, each school has its own rigid policy and guidelines for pastoral care and pupil’s care is engaged with via a tight network amongst the adults at the schools.

研究分野：比較教育学

キーワード：英国独立学校　英国パブリック・スクール　パストラル・ケア　グレート・スクールズ　イングランドの教育

１．研究開始当初の背景

14 世紀から続く英国の伝統的な私立学校が、パブリック・スクールの俗称で日本でも親しまれている。これは英国独立学校（インティペンデント・スクール）の一部を占める学校である。1988 年の教育改革以降、各学校の成績が公開されるようになると、学力重視の傾向が強まり、人格陶冶の涵養を謳う伝統的な独立学校も、いわゆる「紳士養成校」から大学への「進学準備校」へと性質を変容させていった。このような時代の変化の中で学校は両者の役割の兼ね合いに細心の注意を払い、生徒ひとりひとりに対するケアの観点がより重要視されるようになってきたと考えられる。

特に寄宿制を採る独立学校は「パストラル・ケア」という用語に代表される多角的なケアを重視し、時代に即した教育を展開させている。パストラル・ケアの用語は、1950 年代に普及し始めた。日本では 80 年代に注目されるようになり、たとえば藤田英典は教師を「信徒が信仰に迷わないように、あるいは、牧場で羊や牛馬が迷子にならないように、精神面・行動面での指導をする」パスター（pastor）の役割を担うものと論じた。

パストラル・ケアが浸透した最も大きな要因は、公立学校の再編成（総合制中等学校：コンプリヘンシブスクールへ）にあると考えられるが、独立学校におけるパストラルは歴史的にも現在においても公立校のそれとは性質を異にする部分が多い。英国独立学校は、歴史的側面に焦点を当てた先行研究は膨大に残されているが、意外にも現代の研究は少なく、特にパストラル・ケアにおいては、各独立学校で明確に重要視されていながらも先行研究が非常に稀少であるというのが現状である。したがって、英国独立学校、特にパブリック・スクールに焦点を当て、当該校におけるパストラル・ケアの実態を解明したいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、英国独立学校の中でも、いわゆるパブリック・スクールに主眼を置き、当該校における「パストラル・ケア」の実態を解明することを目的にしたものである。

わが国におけるいじめや自殺、うつの問題が現在も連日ニュースになっている。申請当時、内閣府の発表によると、自殺件数は平成 25 年度において毎月 2000 件を超え、8 月現在で既に 1 万 9000 件近くに上っていた。自殺に至るケースは近年の経済情勢や地震等の天災被害など、様々な要因が考えられたが、このような日本の状況に鑑み、報告者の専門とする比較・国際教育学の分野を通して、わが国の学校教育に資する有用な研究の可能性について検討したいと考えるに至った。

報告者の研究分野は比較対象国イギリスの中等教育の中でも、パブリック・スクールと呼ばれる学校群を含む独立学校の研究である。しかし現代イギリスに関する学校教育の研究対象の圧倒的主流は公立学校・公営学校であり、現代独立学校の研究は国内外を通して驚くほど少ない。そして、現代における当該校の研究日本の教育への応用や将来性の観点から汎用性が低いと判断されがちである。しかし依然先行研究が稀少であり、研究分野としては萌芽的基礎研究となるものの、独立学校におけるパストラル・ケアは、注目に値する非常に重要なトピックである。英国パブリック・スクールにおけるそれは、実際に公立校に通常見られる、子どもの安全や健康福祉に重きをおいた単なる生徒指導あるいは生活指導の範疇を超え、青少年の心のケアを中心として、生徒・教職員間の信頼関係を重視し、精神的、身体的、学術的、宗教的等、多方面からの包括的なケアを確立したものであった。

その実態を研究することで、日本の学校におけるケアの在り方に示唆を与えることを期待した。

３．研究の方法

大きく分けて、①文献調査、②定性的調査、③実証分析、の 3 工程に分かれた。当初はこれに、定量的調査（質問紙調査）を加える予定であり、実際に質問紙を完成させていた。ところが質問項目が多く、研究対象校との協議の結果、分量を減らすことが必須となった。しかしそうすると、分析結果に十分な期待を得ることが難しいと予想されたため、結果的に今回の研究では定量的調査を見送ることとなった。

3 工程の詳細は以下の通りである。①文献調査；パストラル・ケアの関連書籍、論文、定期刊行物、学校監査報告書、映像資料、電子ジャーナルを利用し、最新の状況を再確認した。またパストラル・ケア概念成立以前のケアについて、独立学校における設立以来の歴史的変遷を概観した。

②定性的調査；英国独立学校の中でも、特にグレート・ナインを中心に、教職員および生徒に聞き取り調査を行った。一部公立校における教職員についても聞き取り調査を実施し、限定的ではあるが、公立・私立（独立学校）でのパストラル・ケアの相違点を認識した。当初は各校の生徒を聞き取り対象者の中心に掲げていたが、研究協力者からアドバイスを受け、実際には管理職レベルの教職員が主要なインタビュー対象者となった。

③実証分析；これまでに収集したデータを元に、分析を実施した。特に各校の具体的なパストラル・ケアの実態を究明する際は、聞き取り調査の分析・各校のウェブサイトにおいてパストラル・ケアがどのように紹介されているかの分析・および学校監査報告書のパストラル・ケアに関する記述の分析の３つの分析を中心に実施した。

４．研究成果

(1)

「パストラル・ケア」とは、パスター（牧師/羊飼い）が信者/羊を親身にケアするように、学校生活において生徒をケアすることをあらわす用語である。

英国の教育科学省（Department of Education and Science: DES、現在の教育省）によってパストラル・ケアの定義と捉えられる記載が 1989 年に公表されたものの、英国の法令に明示された定義はなく、また英国独立学校を対象としたパストラル・ケアの先行研究は稀少である。しかし、調査対象としたパブリック・スクールにおいてはいずれも非常に重視すべき概念として捉えられ、個々の学校単位でパストラル・ケアの方針やガイドラインが厳格に定められ、教職員の連携を密にして取り組まれていることが明らかとなった。

また、現在では英国私立学校に学ぶ目的として最重要視されているのが生徒の学力向上である。よって学術面におけるパストラル・ケアも非常に重要な役割を担っていることが分かった。特に（2）で示す、今回の研究対象となった学校中でも寄宿制を採る学校は、学術面のサポート体制が通学制の学校にも増して整えられ、学術面におけるパストラル・ケアが重要視されていることが明らかとなった。

(2)

1861 年発足のクラレンドン委員会が 1864 年に発表したクラレンドン報告書で、模範校として挙げられていた「グレート・スクールズ」の全 9 校は 21 世紀の現在においても、その歴史、知名度、設備の充実度、生徒の進学率、進学先大学等の観点から見て同レベルの学校群であると言える。本研究では特にこれらの学校を中心に取り挙げ、調査を行った。

これらの 9 校のうち、大きく分けて 7 校は完全寄宿制あるいは寄宿制・通学制の混合型の学校であり、2 校は通学制の学校である。

グレート・スクールズ 9 校について学校形態別・年代順に分類すると次のようになる。（　）内は設立年度。

完全寄宿制	ウィンチェスター校（1382 年）、イートン校（1440 年）、ハロウ校（1572 年）
一部通学制	シュルーズベリー校（1552 年）、ラグビー校（1567 年）、チャーターハウス校（1611 年）
一部寄宿制	セントポールズ校（1509 年）、ウェストミンスター校（1560 年）
完全通学制	マーチャント・テーラーズ校（1561 年）

また、いずれのタイプのもパストラル・ケアが重視されているが、パストラル・ケアに最も中心的に関わる人物が学校形態によって異なっていることが分かった。その結果は以下の通りである（太字部分）。

英国パブリック・スクール		
完全寄宿制・寄宿/通学混合校		通学制
パストラル・ケアに携わる主要人物	**寮長**	**チューター**
	寮母	
	チューター	
	ハウスメイト・上級生	
	医療チーム	
	学校カウンセラー	
	学校付き牧師（聖職者）	
	著名人・地域の大人・卒業生	

さらに、英国独立学校におけるパストラル・ケアの全体像について、ケアに携わる人物とケアの内容をより詳述したものを以下のような図にて表示できる。

パストラル・カリキュラムのエリアを示すパストラル・ケアの内容表

寄宿制/通学制	パストラル・ケアに関わる人物	主なケア・サポートの役割	
寄宿制のみ	ハウスマスター	全体	
	副ハウスマスター	全体	
	寮母	健康面／精神面サポート	
寄宿制/通学制	学校付き聖職者	宗教面／精神面サポート	
	学校カウンセラー	精神面／キャリアサポート	
	内科医	健康面サポート	
	看護師		
	精神科医	精神面サポート	
	チューター（教員が兼任している）※通学制ではパストラル・ケアに最重要の人物）	学習面／精神面サポート（通学制では全体）	PSHE(人格的社会的および健康教育)等、パストラル・カリキュラム担当の該当者エリア。
	教員	学習面／精神面サポート	
	ヘッドマスター（校長）	精神面サポート	
	著名人・卒業生・地域の大人等		
	代表生徒	精神面サポート	
	上級生	精神面／学習面サポート	

(3)

通学制の学校の代表としてハロウ校、通学制の学校の代表としてセントポールズ校を例に挙げ、比較教育学的観点から分析すると、同じ高学年の生徒の中でも、学校の代表を務めるハロウ校の生徒はパストラル・ケアの概念について非常によく理解し、他生徒に対するケアの意識や教職員との連携を重視していることが分かった。セントポールズ校の生徒については、パストラル・ケアについては用語を認識しているものの、十分に概念を理解しているというまでは至らなかった。代表生徒ではなかったことと、通学制の学校であることが理由として考えられる。

教職員については、いずれもパストラ

ル・ケアに深く関わる人物に聞き取りを行った。ハロウ校については複数回の訪問において3名に聞き取りをする機会を得たが、パストラル・ケアが当該校において非常に重要な役割を果たしていることを十分に認識しているという点はいずれの人物においても共通していた。ただし、公立校と私立校（独立学校）におけるパストラル・ケアの性質については、両者で相違しているか否かで見解が分かれていた。また、寄宿制を採る学校における共通点として、寄宿制において特にパストラル・ケアが非常に重要であること、またケアに関わる人物が寄宿生活における中心人物（寮長・寮母・チューター）であることが分かった。

2014年度-2016年度の研究期間中、パストラル・ケアについての聞き取り調査を行うことができた人物の一覧は以下の通りである。

学校種	所属	身分
独立学校（中等教育段階）	ハロウ校	管理職教員1
		管理職教員2
		管理職教員3
		非常勤教員
		寮長
		寮母
		代表生徒（4名）
		一般生徒
		在学生の保護者（4名）
	ラグビー校	管理職教員1
		管理職教員2
		寮長
		一般生徒（4名）
	ウェストミンスター校	管理職教員1
		管理職教員2
	セントポールズ校	管理職教員
		一般生徒（3名）
	ウィンチェスター校	管理職教員
	イートン校	管理職教員
	マーチャントテラーズ校	一般生徒（1名）
公立学校（中等教育段階）	ウォルバーハンプトンハンプトン・ガールズ・ハイスクール	管理職教員
公立学校（初等教育段階）	エルドン・プライマリースクール	管理職教員
		元管理職教員
大学	ローハンプトン大学	名誉教授
	計	35名

なお、英国パブリック・スクールに関して、研究分担者となっていた研究においても、グレート・ナインの各校を訪問する別の機会があったため、9校すべての学校において聞き取り調査の実施を実現することができた。

(4)

各校のウェブサイトには、調査対象としたいずれのパブリック・スクールにおいても、パストラル・ケアについて言及があった。ハロウ校とセントポールズ校を例示すると、ハロウ校はサポートスタッフ、プログラム、要綱の3点からパストラル・ケアを説明しており、一方セントポールズ校は、サポートの種類と入学時におけるケアの説明がなされている。またサポートスタッフ、課外活動についても記述されていた。ウェブサイトから浮かび上がるパストラル・ケアの解釈は、「生徒に対する人間形成を目的としたケア」と言える。

(5)

英国では独立学校委員会（Independent Schools Council: ISC, 以下 ISC）所属の独立学校の監査については、独立学校監査団（Independent Schools Inspectorate: ISI, 以下 ISI）が行っており、監査結果に基づいて同組織が監査報告書を作成・公表している。今回の研究対象校はいずれも、ISC 所属の独立学校であるため、公開されている学校監査報告書において、各校のパストラル・ケアについての記述を調査した。

その結果、ハロウ校とセントポールズ校では、監査年度が異なり、監査枠組みが若干変化したためか、セントポールズ校の方がパストラル・ケアに関して詳述されていたことが分かった。また、両校とも人間関係が良好で、双方ともケアが万全な体制で行われ、両校とも身体的、精神的、宗教的ケアが得られるという記載が見られた。

一方、ハロウ校は生徒の人間関係が良好と言及され、セントポールズ校は教職員であるチューターがパストラル・ケアの中心であることが窺えた。

(6)

パストラル・ケアの第一人者であるローハンプトン大学名誉教授のロン・ベスト（Ron Best）氏への聞き取り調査により、パストラル・ケアを研究するための5つの観点が明らかとなった。それが以下の通りである。それぞれの観点（①～⑤）をパストラル・タスクと言う。

①ケースワーク

＜内容＞

教員が生徒を個別に手助けすること。

マンツーマンでのケア。

例）

問題を抱える生徒を昼休みなどに呼んで話

を聞くこと。

②コントロール統制
＜内容＞
規律を統制し、コントロールをすること。
例）
ある生徒が問題行動を起こした場合、謹慎処分になり、2 週間学校の来させなくする、というようなこと。

③パストラル・カリキュラム
＜内容＞
子どもの人間形成に関わることを教える科目のこと。
例）
性や信仰、就職、食事などについて学ぶカリキュラムを指す。

④コミュニティ形成
＜内容＞
学校をひとつのコミュニティにすること。（学校におけるコミュニティとは、活動を共にし、そこに属する子どもたちを助け、学校に対して何らかの責任感を感じるところ。教育し、そこに参加しているという感覚を持つところ。）

⑤パストラル・マネジメント
＜内容＞
上記の 4 要素を、学校の管理職が主導して、運営する行動のこと。
例）
ケースワークや統制を適切に、かつすべて行っているか、をマネジメントすること。

また、同教授には、研究協力者として、パストラル・ケアについての研究手法や方向性について様々な助言を得ることができた。
本研究では、パイロット調査として、まず英国独立学校の中でも、最も代表的な英国パブリック・スクールを調査対象校として選定した。今後、いわゆる 9 校に代表されるような伝統的なエリート校のみならず、学業成績等が中程度、あるいは下位に属する独立学校を比較教育学的観点から広範囲にわたって量的研究を実施する場合、上記で示した 5 点を中心に質問事項を組み立てることにより、各学校におけるパストラル・ケアの実態を効果的に究明することが可能になると考える。

＜引用・参考文献＞
藤田英典『教育改革』岩波新書、1997 年。

Best, R.,‘Pastoral Care & Personal-Social Education A review of UK research undertaken for the British Educational Research Association’, BERA, 2002.

Best, R.,‘The Impact on Pastoral Care of Structural, Organisational and Statutory Changes in Schooling’, British Journal of Guidance and Counselling, Vol.27 No.1, 1999.

Department for Education and Science, ‘Report by Her Majesty’s Inspectors on Pastoral Care in Secondary Schools: An Inspection of Some Aspects of Pastoral Care in 1987-8’, Stanmore: DES., 1989.

５．主な発表論文等
（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
古阪肇、
「英国の寄宿制私立中等学校におけるパストラル・ケアの重要性」『早稲田教育評論』第 30 巻第 1 号、2016 年 3 月 31 日発行　97-108 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 1 件）
古阪肇、
「英国パブリック・スクールにおけるパストラル・ケアの認知と解釈」（日本比較教育学会第 52 回大会　2016 年 6 月 24-26 日）。大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）。

〔図書〕（計 1 件）
①古阪肇他、ミネルヴァ書房
『教育学入門　30 のテーマで学ぶ』2015 年 5 月 20 日　初版第 1 刷発行、
本人担当部分：第 8 章　学校文化（掲載頁 52-57）全 237 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
古阪　肇（FURUSAKA, Hajime）
千葉大学・大学院医学研究院・特任助教
研究者番号：20710536

(4)研究協力者
松原　直美（Matsubara, Naomi）
ロン・ベスト（Ron Best）
ジョナサン・ブロック（Jonathan Block）
ジェシー・エルジンガ（Jesse Elzinga）
マーク・ターナー(Mark Turner)
パーシー・ハリソン(Percy Harrison)
ジェームス・スタンフォース(James Stanforth)
ロドニー・ハリス(Rodney Harris)
ケイト・クランチー(Kate Clanchy)
ジェイソン・ジェームス(Jason James)
タイモン・スクリーチ(Timon Screech)
ニール・ハンプトン(Neil Hampton)
ニール・サケット(Neil Sackett)
ユアン・マッケイ(Euan McKay)
ジョシュア・スミー(Joshua Smee)

他　インタビュー協力者紹介、

翻訳作業補佐に多数。